

たけなかしげかど

竹中重門

竹中重門は、天正元年（1573）重治の子として岩手で生まれた。幼名を吉助といい、7歳で父を亡くし、天正16年（1588）家督を継ぎ、翌年、不破郡内に5千石の領地を与えられた。天正18年（1590）の小田原城攻め、文禄元年（1592）の朝鮮出兵に秀吉のもとで従軍し、文禄3年（1594）河内国内（大阪府）で千石を加増される。慶長5年（1600）関ヶ原合戦が起ると、当初西軍に属し、犬山城（愛知県）に籠城したが、岐阜城が落城すると、加藤貞泰とともに東軍側についた。合戦当日は、関ヶ原北部の丸山に黒田長政と布陣し、東軍ののろしをあげ、笹尾山の石田三成を攻めた。合戦終結後には、徳川家康の命令で戦死者のために首塚を作り、西軍の武将、小西行長を捕らえる功績をあげた。大坂冬の陣、夏の陣にも徳川方として供奉し、江戸時代を通じて存続する、旗本竹中家の基礎を作った。

また、林羅山に和漢の学を学び、文筆にも優れ、『時雨記・木曾記』といった旅行記や、豊臣秀吉の伝記『豊鑑』を著した。

寛永8年（1631）江戸屋敷で亡くなり、泉岳寺に葬られた。

なお菩提山城を降り、竹中氏陣屋を設けたのは重門である。



岐阜県指定史跡 竹中氏陣屋跡

竹中重常

たけなか しげつね

竹中重常は、竹中重門の子として、慶長3年（1598）山城の伏見で生まれた。重常が杉原長房の娘を妻に迎えたことを聞いた林羅山は、賀詞を父重門に贈呈した。関ヶ原合戦では人質として清洲の福島正則のもとへ送られている。大坂冬の陣・夏の陣は父とともに出陣した。寛永17年（1640）久能山東照宮（静岡県静岡市）修補奉行、正保2年（1645）滝山東照宮（愛知県岡崎市）の普請奉行、正保4年（1647）には近江国坂田郡（滋賀県米原市）の代官に任命され、2万890石の地を預かった。万治元年（1658）禁裏造営の奉行の功により、禁裏より備前長光の太刀を賜り、従五位下越中守に叙任された。寛文3年（1663）祖母得月院の遺産で禅幢寺本堂を建立した。



禅幢寺本堂



竹中重栄の墓所（禅幢寺）

竹中重栄

たけなか しげよし

伊予国（愛媛県）大洲加藤出羽守家臣加藤民部重貞の子で、竹中重常の孫重長に子になかったため、重長の死後養子となり、天和2年（1682）家督を継いだ。大洲より神田、寺島、棚橋、喜多村などの家臣が随伴した。翌年、將軍綱吉に謁見し正徳5年（1715）輪王寺宮に従って京へ赴いた。享保14年（1729）致仕、叡山と号し、詩文に優れていた。また、竹中家の古記録を整理し、後年それが竹中元甫が著した『過現二世牒』などとして伝わっているほか、禅幢寺の竹中家墓所の整備も行っている。

たけなかしげかた せきほうたい

竹中重固と赤報隊

竹中重固は、旗本竹中家の最後の当主である。万延元年（1860）当主の竹中重明に継子がなかったため、分家から養子に迎えられ、翌年、家督を継いだ。元治元年（1864）第1次長州征伐の際に陸軍奉行に任じられ、慶応4年（1868）鳥羽伏見の戦いでは旧幕府軍を率い、最前線で戦うが敗れ、朝敵として徳川慶喜とともに官位を剥奪された。その後も東北地方を転戦し、函館の五稜郭で榎本武揚らと新政府樹立に着手した。明治2年（1869）官軍の攻撃により、五稜郭が占領されると東京へ戻り自首した。

竹中重固



赤報隊顕彰碑

赤報隊は、鳥羽伏見の戦いの直後、官軍の先遣隊として倒幕のために東進する部隊として結成された。公家の綾小路俊実らが中心となり、3つの隊で構成されていた。慶応4年（1868）1月15日、金剛輪寺（滋賀県愛荘町）を出発し、18日に岩手に到着した。竹中家では当主の重固が不在であったため、家老の児玉周左衛門が重固の減刑を願い、有志を募って赤報隊に十数名を参加させた。東進中に、赤報隊が掲げた「年貢半減令」が問題となり帰京命令が出され、2・3番隊は命令通り帰京したが、相楽総三が率いる1番隊は、命令を無視してそのまま信濃方面へ進んでいったため、最後は偽官軍のレッテルを貼られ、厳しく処罰された。竹中家家臣の北村与六郎は、中山道の碓氷関所（群馬県安中市）をおさえるため先行していたが、坂本宿で安中藩兵に襲われ命を落とした。